

「日本に生まれてよかった！」

この年末年始に映画『ラストサムライ』見た方も多いのではないのでしょうか？ハリウッド映画で主演はトム・クルーズ。ところがおそらく、観客の共感を全てさらっていったのは、渡辺謙であったことは疑う余地がない。日本人が共感したのは映画の中で渡辺謙が見せた武士道にあるからだ。

この映画を観て率直に「日本人に生まれてきてよかった」と思えた方にはきっと、今でも「武士道」の魂が遺伝子に刻まれている証拠なんじゃないでしょうか。武士道は我々が生まれるずっと以前に姿を消したのかもしれませんが、今もなお、その精神が日本人の魂の中に受け継がれているからなんじゃないかな。

「武士道」とは、武士がその職業と日常生活において守るべき道である。武士の掟であり、武士の義務です。日本はその昔、封建制度により武士は主君に忠誠を誓っていた。武士を特徴付けるものの一つに「名誉」が挙げられる。武士は生まれながらに武士であり、その身分に伴う義務と特権を持っていた。彼らはそれらを自覚し、それに恥じないように「名誉」を重んずるようになっていった。

この「名誉」がどれほど大切であったかは、名誉のためには自らの命を絶つ「切腹」からも想像できる。武士の名を汚すものは切腹であり、不名誉をこうむるくらいなら自害する。

日本人の根底にあるのは、恥の文化、なんですね。

子供の頃に言われたことはないだろうか「男のくせに泣くとは恥ずかしくないのか」「そんなことをしていると笑われるぞ」と。

武士は「名誉」を重んじたが、では軽々しく命を捨てたのかといえば、そうではない。絶対に曲げられないものであるときにだけ命を絶つことをいとわない。自分の命を捧げるに値するもののために死す。彼らは尽くすべき主君のために命をたつが、「武士道」の中心にある教訓は「自己鍛錬」にあるのではないかな。

今でこそ、主君のために命を絶つといった価値観はなくなった。封建制度では主君が領地を与える代わりに武士は忠誠を誓って戦った。これに似た制度が近年の日本にもあった。それは「会社のために働きます」といったサラリーマンシップだ。企業は終身雇用制度を、従業員は定年退職までの労働を提供した。ところが、この考え方や制度もやはり、終身雇用の崩壊と共に消え去ろうとしている。

そんな時代であっても、映画『ラストサムライ』の最後の戦いのシーンに我々は心を打たれる。

それはなぜならば、武士は戦いの中で、鉄砲の弾が飛び交う中でも、刀一本で相手に向かっていくからで。その結果がどうなるかがわからないのではない。わかっている姿に心を打たれる。

そんな武士の心はまさに、吉田松陰が刑に就く前夜に詠じた以下の歌のような心ではないだろうか。

かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂

死ぬとわかっていても戦う姿に美意識を感じる現代の日本人。その心は桜の花に象徴される。桜の花は風が吹けば、いとも容易く散ってしまうが、その生命に執着しない姿にこそ、心を打たれ、美を感じるのが日本人である。これは命を捧げるに値するもののためには、儚いほどに己の命を廉くする武士道精神だ。

日本人の魂の中に、きっとどこかに武士道は根付いていて、これから先も日本人の美意識のように残ってほしいと願う。